

# 原爆文学研究会報

第二八号

原爆文学研究会 二〇〇九年九月

古典と呼ばれる日 先日図書館で、ある必要があつて岩波書店の『新日本古典文学大系』を本棚の間で立ち読みしていたとき、同じ『大系』でもやや新しい背表紙が連なる先に「明治編 森鷗外」という文字をふと認め、未摘花の巻を繰っていた手が止まりました。

鷗外が「古典」になった。軽い衝撃でした。

学生時代、明治の作品は「近代文学」と呼ばれていました。「近代」という響きは、遠く離れてはいてもまだ現在と地続きのところにある時間や風景を髣髴させました。ちなみに「古典」となると、もういにしえの臚。しかしよくよく考えるとあれから二十年。その間に成人した学生たちはいまや「舞姫」の擬古文を「意味フメーやし。」と苦笑します。「源氏物語」の中の語句を調べるように、そのうち「坊っちゃん」を古語辞典引き読み解く時代が来るのだろうか。いや来るに決まっている。私たちがいま手にしている現代小説もやがて「古典」と呼ばれ、それならまだしも、『大系』様のものに収める必要なしとみなされれば人々の記憶から確実に消え去るのだなあ、と、至極当たり前のことなのですが、しばし感慨に耽りました。

E・H・カーは『歴史とは何か』で、歴史とは、過去の人々（カーによれば「歴史家たち」）が「事実」と対峙したとき、それを「歴史」として記すか否かを判断し取捨選択した結果のもの、ということを書べています。これを最も危険な方向へ振り切つてシミュレーションしたとも言えるのが、ジョージ・オーウェルの近未来小説『1984年』でしょう。「真理省」に勤める主人公の仕事は、現在の体制にとつて不都合なことが記された過去の新聞記事を次々と別の記事に差し替えることです。つまり、過去の歴史を抹消していくわけですが、荒唐無稽だと笑えないところが不気味です。

さて、研究会では原爆や戦争を描いた文学について、その描かれ方がしばしば取り上げられますが、やはり六十四年という歳月にともなう変転がそこには感じられます。「事実」に対する作家自身の解の反映でもありますが、作家は時代というものに所属していて、それは私たちも共有しています。その時代を生きる人々にとつて何が必然なのか、という問題が移り変わっていくなら、さらに二十年後、文学はどうなっているのだろうか。

図書館の片隅でしばし考えたのはそんなことでした。（内田友子）

## 第三回戦後文化運動合同研究会 第二八回原爆文学研究会合同研究会報告

二〇〇九年八月二十九日（土）・三日（日）、広島大学東千田キャンパスで開催した第三回戦後文化運動合同研究会・第二八回原爆文学研究会には約五〇名が参加。

「広島／ヒロシマ」をめぐる文化運動再考——「つながり」と想像力の軌跡——というテーマで七名の口頭発表と六名のコメント、参加者全員による討議を行いました。

今回は原爆文学研究会会員・茶園梨加氏・柳瀬善治氏・野坂昭雄氏による印象記を掲載します。



# 合同研究会印象記（八月二十九日午後）

茶園 梨加

「原爆」は、戦後文化運動において、大きなトピックスである。一九五〇年代の炭鉱労働者による機関紙・誌を読んでいると、「原爆」を前提とした反戦、平和運動の記述と頻繁に出会う。朝鮮戦争、第五福竜丸事件、そして安保闘争へと続くように、一九五〇年代には「原爆」が文化運動のなかで頻繁に語られていた。それが文学として表現される時、どのような問題が新たに立ちあがってくるのだろうか。疑問を抱きながら、研究会に参加した。

一日目は、まず、水島裕雅氏が「峠三吉と「われらの詩の会」と題し報告を行った。「われらの詩の会」は一九四九年に発足、機関誌「われらの詩」を創刊、雑誌は五三年末の二十号まで続いている。掲載された全作品を「農業」「闘争」「生活」「反戦」「原爆」「朝鮮戦争」などのキーワードで分類され、そのなかで、「原爆」と「反戦」が群を抜いて多い素材であったという数値データは興味深い。また、栗原貞子夫妻が参加した「中国文化連盟」についても触れられ、「われらの詩の会」との相異を指摘した。コメント担当者であった宇野田尚哉氏は、「われらの詩の会」の特徴を、周辺の詩サークルをとりまとめ、新日本文学会とも繋がりがあがる、「山陽地方の拠点サークル」であったと位置づけた。雑誌が国際派、主流派の指導下での闘争を経て続いている点や、プランゲ文庫の資料との組み合わせで考察するという点などが、今後資料を読み解くうえでの方法と述べた。全体討議では、書き手の男女の比率の問題や、「中国文化連盟」と大政翼賛会との繋がりの指摘、国際派／主流派の分裂との呼応の問題、

直接的な長崎との繋がりが皆無であることの指摘、などが挙げられた。書影などがあればもっと資料の手触りが伝わったのではないかと感じた。復刻が待ち遠しい資料である。

二つ目の報告は、竹内栄美子氏による「山代巴の文学／運動」である。竹内氏は、山代には「女性／農村／原爆」という三つのテーマがあり、特に農村女性の人権確立の比重が多かったと述べた。三つのテーマが別個にあるのではなく、人権問題、平等思想、平和運動としての文学／運動に、「女性」がクロスするという構造であることが指摘された。そして、「人民文学」に連載された松田解子との往復書簡「日本の女」を辿りながら、論点を明らかにする。一方で原爆被爆者援護活動を行ないながら、他方では農村女性たちの解放運動をおこなっていた強靱さと思考の柔軟さを改めて感じた。このような山代の双眼鏡と顕微鏡を同時にもつような思考を、私は上野英信や森崎和江にもみる。古い共同体を基盤として「集団的意志」を形成したことは「サークル村」や「無名通信」と近いものがある。松本麻里氏によるコメントでは、一、谷川雁から山代巴への批判、二、中井正一の戦時下の女性に対する批判をどううけとめたか、三、「農村」における山代巴の立ち位置、四、一九五〇年代女性運動批判に対する返答として、の四項目にまとめられた。そのなかでも、四において、「個人の解放」と「類としての女性」の解放を同時にめざす立場の困難さそのものを山代が体現しているのでは、という指摘には同感である。先に挙げた、双眼鏡と顕微鏡両方の視点を、個人と集団の問題においても実践していたのではないかとも思われる。個を打ち消さないかたちでの集団としての主体形成を考えると、ここでは森崎和江はどうだったか、石牟礼道子はどうだったか、と問い直したい。そして改めて彼女らの文章に触れることで、各々の問題

提起の違いを考えたい。

一日目最後の報告は、楠田剛士氏による「山田かんとサークル誌」であった。二日間の全発表のなかで、唯一「広島」以外の地域における文化運動の報告である。山田かんにとって詩人・批評家としての出発がながさき芽だち文学サークル「芽だち」であったと述べながら、他の同人の作品を紹介したうえで、労働者による原爆表現の場であったとその活動を捉えた。先行研究をもとに山田かんとながさき芽だち文学サークルの活動を追った年表を提示された。この年表に、長崎生活をつづる会や佐世保のサークル運動の情報などを加えていけば、今まで見えてこなかった一九五〇年代の長崎における文化運動が明らかとなるかと思う。もちろん、そこにはうたごえ運動なども入っていくのだろう。コメントは坂口博氏が行ない、山田が基地としての佐世保について述べている七三年の言説をもとに、長崎と佐世保という二点における文化運動の繋がりと分断について問題提起をする。北部九州の様々な文化新聞について紹介され、プランゲ文庫に収録されているそれらの調査の重要性を指摘した。この点が一番目の報告でも指摘された点であり、自分自身が次にすべき調査でもあることを確認した。私自身が興味を持ったのは、交流雑誌である。「芽だち」誌面上にみられる交流誌には福岡人民文学サークル「海峽」や、熊本文学会「熊本文学」、大牟田市の炭鉱地帯文学会の名がみられる。「海峽」は、「人民文学」誌上でよく目にするサークル名であり、「熊本文学」との交流も深いとの記述を目にしたことがある。そのような「人民文学」系のネットワークを考えると同時に、「サークル村」に参加することのなかった大牟田のサークル名が見られること、そしてその一方で「地下戦線」や「炭砒長屋」など「サークル村」に結びつくサークルの名が出てこない点は今後

考察すべきかと思う。もちろん、この問題は九州内だけではない。同じ「原爆」という問題を抱えながらも、峠三吉や山代巴の活動と、長崎市の文化運動が直接的に結びついていないという問題にも関わ

る。「原爆文学」を、戦後文化運動のネットワークのなかにみると、アクティブなものとしての文学を感じる。だが、なお分からないのは、各々の作品の個別性と集団としての主体の問題である。一人の声が、他の声と混じり合い、集団の声として集約される時、声は強化されるが、個別性は失われてしまう。「原爆文学」を運動としてとらえるときに見えなくなる作品の個別性。その方法論が、私には未だ断絶しているように思えて、地団駄を踏み続けている状態である。やはり双眼鏡と顕微鏡、両方の視点を手にしたいと私は思う。

## 合同研究会印象記（八月三〇日午前）

柳瀬 善治

第三回戦後文化運動合同研究会・第二八回原爆文学研究会合同研究会二日目は岡村幸宣氏と小沢節子氏の絵画による原爆表象と文化現象をめぐる発表が続いた。

岡村氏『「原爆の図」全国巡回展の軌跡』は『原爆の図』展が戦後どのように全国展開し、また世界巡回展へとつながっていったのかを各地方の資料や新聞報道を丹念に検証したもので、その中で巡回の担い手の違いや観衆の印象などにも目を配りながら論じ、戦後の「文化運動」のありかたを詳細にあとづけた。「原爆の図」という

語の登場を一九五〇年二月二四日の『婦人民主新聞』ではないかと推測し、そこで出された絵解き文がその後『原爆の図』につけられる絵解き文の原型になつていゝのである。一九五〇年十月五―九日に広島爆心地で行われた展覧会では峠三吉「われらの詩の会」との対応があつたことが紹介され、この時代の個々の運動のコラボレーションの在り方が具体的に示された。年表として整理された巡回展の軌跡はわかりやすく、それぞれの主催団体についても豊富な情報が含まれていた。この際、複製展示やパネル展示がなされたが、これについても米軍の接収を避けるため、また「自由に触つてもらつてもいい」という通常の美術展示とは異なる展示コンセプトによるものであることが指摘された。さらに丸木『原爆の図』以前のヒロシマ絵画（そこにはゲルニカ風、キュービズム風のものも含まれる）にも言及があり、戦後まもなくのさまざまな原爆表象の在り方が垣間見られた。

小沢節子氏「体験者の表現と運動のあいだ――丸木スマ、大道あやの「絵画世界」を中心に――」は、丸木位里・俊の「周辺」にいた丸木スマ、大道あやの「絵画世界」へ光を当てたものである。スマの絵には絵画教育でなされる「遠近法」が不在であり、それが逆に「多中心的な」表現を可能としており、また題材として書かれる「生き物たちのユートピア世界」がその裏側としての「この世の地獄」を前提としているとした。スマは丸木夫妻の（絵は誰にでも描ける）という理念の実践モデルとして考えられてきた部分があつたが、今回の発表ではそれにとどまらない「体験者の絵画」の可能性を「多中心的」にとらえなおすことを目的とするものであつた。

ついで、大道あやについては、花火事故で夫を失うという彼女自身の過酷な人生について触れたのち、彼女の「原爆の図」批判、す

なわち、「非体験者による被爆体験の表象がもたらす占有への抵抗」に「被爆市民の絵画」との類似性という観点から光を当てなおし、それが現在では「一枚岩にとらえられた被爆者体験の表象の独り歩き」という事態を生んでいることに危惧を呈したうえで、あやの原爆の絵の試みを含むたえざる中断と分裂が「絶対的なポジションはない」「死者の体験を表象することの暴力性」への自覚へとつながつていゝこと、それは被爆者自身による表象においても例外ではないのだという点を指摘した。まとめの部分では、体験者の経験の個性と被爆体験の共通性との関係が改めて問われ、（絵は果たしてだれでも描けるのか）という問いを、（何が人をして描かせるのか）という問いへと変換することを提起した。

波瀾剛氏によるコメントでは、「なぜ「絵」ではなくて「図」なのか」「スマの沈黙と描き続けることによるずれ」「複製技術」であることの問題が指摘された。山本唯人氏によるコメントでは、東京南部文化運動と東京大空襲への考察とのかかわりから「表象が立ち上がる場」への着目、具体的には個人の体験創作としてとらえるのか、それとも集団実践（文化運動）を通じてとらえるのか、そのせめぎあいを見ることがの重要性が指摘された。これは戦争の記憶の語りがどのように形成され、展示空間と社会空間との接点において定型化・横領されていくのかという問いともつながっており、またそれに回収されない部分を、しかも個人に限定せず「群れ」としてとらえていくことへの可能性をも示唆した。

二氏のコメントは、原爆の表象を、社会性や言説とのかかわりにとらえ、さらにそれに回収されない残余やずれをどのように受け止めていくという点で共通しており、さらにそれはトラウマ批評の問題―代行Ⅱ表象の集合性と単独性との関係を、表象の事後性をも踏

まえたうえでどう批評しうるのか—ともかかわっている。

「原爆の図」が触知・消費可能な複製技術（社会的な戦略）であることと被爆体験の表象＝複製不可能性（単独性）の認識とは裏表の関係になっており、解読を通してそのあいだに様々な断層や残余を見ていくことが必要となるだろう。たとえば、具体的な例として、スマの（生き物たちのマンガラ）＝（動物たちの都市）（鶴飼哲）が「群れとしての表象」「トラウマ批評」とどのようにかわるのか（人間ならざるもの（文化・運動に回収できないもの）へのまなざしの有無）も一つの興味深い視座とも言えるのではないか。

## 合同研究会印象記（八月三〇日午後）

野坂 昭雄

今回の原爆文学研究会は、戦後文化運動合同研究会との共同開催という機会に恵まれた。戦後文化運動合同研究会は研究会の開催数こそ少ないものの、サークル運動研究の牽引役として活発に活動していて、今回も大変刺激的な会になった。また二日間を通じて、さまざまな観点から白熱した議論が交わされたが、その中で互いの関心や方法などが理解できたように思う。少なくとも、丹念な資料調査を基盤にして、文化を形成・推進するさまざまな力学を批判的に分析する戦後文化運動研究会の方法は、原爆（文学）をめぐる考察においても重要であると強く感じた。

さて、二日目の午後は、「うた」という角度からサークル運動と（広島／ヒロシマ）との関わりが取り上げられた。午後の最初の発表者

である道場親信氏は、戦後のうたごえ運動の歴史をたどり、その組織化のあり方を丹念に分析している。主に取り上げられたのは、東京南部の南部文化集団に属する浅田石二が一九五四年に作詞し、木下航二が歌詞を改作して曲をつけた「原爆を許すまじ」だが、この歌が全国的な流行となっていたプロセスは興味深かった。余談だが、私の出身大学には今も「みんなうたう会」（通称「みなうた」というフォークソングのサークルがあるはずだ。「うたごえ」運動の流れの中で結成されたと思えないネーミングだが、こうした形で命脈を保っている「うたごえ」など、文化的な力を骨抜きにされた残滓に過ぎないのだろう。ネット社会の今日、「うた」の共有は限りなく困難となっているし…。発表を聞きながら、こんなことを思っていた。

ところで、柳瀬氏が質疑の時間に述べたように、メディアの差異を考慮することは確かに重要である。戦後の「うたごえ」運動は、ラジオによる戦争詩の朗読放送とよく似ている。しかし、ラジオで拡散した戦争詩と違い、「原爆を許すまじ」は人から人へ口伝えで伝えられ、指導によって拡散していった点でメディア的には後退している。戦前と戦後との間には連続面と切断面とが併せ存在している。

しかも、戦後に左翼的なインターナショナルリズムを担った労働歌と、近代教育の中で歌われた唱歌の類、また『ビルマの豎琴』や『二十四の瞳』の中に登場する「うた」など、いずれも一斉に発することで共同性の形成が目指されているように見えるが、しかし決定的に異なっている。歌の状況、背景によって違ふのは当然だが、「うた」のメロディや歌詞など、具体的に何が違ふのかを見ていき、それぞれの「うた」が、人々の心情にどう働きかけ、どう組織化へと利用されていったのか、細かに見ていきたい所でもある。

次の東琢磨氏の発表は、氏の『ヒロシマ独立論』から展開された、〈広島／ヒロシマ〉をめぐる思索であった。『ヒロシマ独立論』を読み、また今回の発表を聞いて、私は今福龍太の『クレオール主義』を思い起こした。およそ十分な理解とはいえないであろうが、東氏は今福と同じように、〈広島／ヒロシマ〉という空間をある特定の支配的イメージや表象の中に押し込めることを徹底的に否定している。米軍基地を抱える沖縄に似て、原爆投下の歴史を持つ広島という地にもある種の緊張感がある。人々が暮らし、固有の文化を生み出しつつある広島という地を固定化したイメージから解放すること、それは広島で暮らす人々が肌で感じている現実であると思われるし、広島以外に暮らす者はそれを受け止める必要があるのだと感じた（受け止め方が難しいのだが）。原爆文学研究会も、〈原爆〉を単に悲惨な体験として限定的に表象するのではなく、より多彩な形で描いている作品を評価しようとしているが、私たちはステレオタイプに陥るのを避けると同時に、「本当にステレオタイプなのか？」という問いも発していかなければならないと感じた。

最後に、小田智敏氏が「オバマジョリティー音頭」を紹介し、反核平和運動の中で音楽が利用されるケースについてコメントした。後日、ネット上で実際に「音頭」の映像を見たが、確かに好意的に捉えるのは難しかった。また、身体を含んだ形で市民を平和運動へ動員している点は、戦時国家的な身体管理に似ているし、また文化的な行為を行政が政治的に利用している面も批判的に捉えられるべきである。しかし一方で、質疑の中で中野和典氏が述べたように、一向に核廃絶の道が見えないマイノリティの運動推進者が、オバマ大統領のコメントに触発され、自分たちがマジョリティー化したという幻想を抱いている状況が描かれているとも取れる。その点で、「音

頭」は痛烈なアイロニーにもなっている。東氏が『ヒロシマズ・ノート①』『平和構築』ってなんですか？』（会場で購入）で述べているように、「平和」「復興」といった言葉が実際のリアルな政治の中で字義通りに使われることなどない。だから、この音頭を通して浮かれている一部の人々に憤りを感じる小田氏の立場も理解できる。

やや疑問に感じたのは、コメント後の中野氏の質問（「音頭」を評価する視点も必要ではないか？）に対し、戦後合同文化研究会側から一斉に否定的なコメントが出されたことだ。正直に言わせてもらえば、こうした形の批判には少々抵抗を覚えたし、逆に言うと、「音頭」や「原爆を許すまじ」の歌詞に着目し、また享受する人々の感情に拘った中野氏の姿勢は、私には好ましく映った。もちろん、自分の研究のスタイルや立場に甘んじることなく、不断に問い直さなければならぬ。自戒の念を込めて言うのだが、今回の研究会はその絶好の機会になったと思う。

## 彙報

### 第三回戦後文化運動合同研究会・第二八回原爆文学研究会合同研究会

○日時 二〇〇九年八月二十九日(土)・三〇日(日)

○会場 広島大学東千田キャンパスL四〇四 講義室

○テーマ 〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考

——「つながり」と想像力の軌跡——

報告1 峠三吉と「われらの詩の会」

報告者 水島 裕雅

コメント 宇野田 尚哉

報告2 山代巴の文学／運動

報告者 竹内 栄美子

コメント 松本 麻里

報告3 山田かんとサークル誌

報告者 楠田 剛士

コメント 坂口 博

報告4 「原爆の図」全国巡回展の軌跡

報告者 岡村 幸宣

報告5 体験者の表現と運動のあいだ

——丸木スマ、大道あやの「絵画世界」を中心に——

報告者 小沢 節子

コメント 山本 唯人／波瀾 剛

報告6 広島市街区とうた・詩・演劇

報告者 東 琢磨

報告7 「原爆ゆるすまじ」と東京南部

——50年代サークル運動の大衆化と極大化のシーン——

報告者 道場 親信

コメント 小田 智敏

(全体進行 道場親信／川口隆行)

## 機関誌 「原爆文学研究」第八号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイ等も掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇九年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)

を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一一九三 佐世保市沖新町一―一

佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

編集後記

### 編集後記

八月の合同研究会は茶園梨加氏・柳瀬善治氏・野坂昭雄氏による印象記でも報告されております通り大変刺激的なものになりました。企画から当日の運営まで尽力された道場親信氏・川口隆行氏のお二人に心よりねぎらいの言葉を贈りたいと思います。本当にお疲れさまでした。

この合同研究会の成果は「原爆文学研究」第八号に特集を組んで掲載する予定です。ご期待下さい。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail [tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>